

社会のシステムの一環として、 学校が社会とつながり、 多様な生徒の学びを保障する

ここまで、生徒の学びの機会を保障するために様々な工夫を重ねている5つの事例を紹介してきた。それらの実践を通じて見える、日本の高校教育の未来はどのようなものなのか。その未来に向けて、全国の学校はどんな視点や考え方、取り組みを取り入れることができるのか。高校教師として地域連携などを推進し、定時制課程の教頭なども務めた福井大学連合教職大学院の中森一郎教授と、VIEWnext編集部統括責任者の柏木崇が語り合った。

福井大学
連合教職大学院 教授、
独立行政法人
教職員支援機構 フェロー

中森一郎

なかもり・いちろう 福井県の公立高校に国語科教諭として勤務後、福井県教育庁課長（学力向上）、福井県立若狭高校校長、福井県教育庁学校教育監等を歴任。若狭東高校勤務時は、若狭地区の県立高校再編整備にも携わった。現在、独立行政法人教職員支援機構のフェロー（学び合う教師コミュニティの形成支援）も務める。

外部と協働して、 学びの選択肢を増やす

柏木 中森先生は県立高校や教育委員会に勤務され、本特集の事例等で示した、少子化地域の学校経営や多様な生徒への対応、地域と協働した学びなどに取り組まれてきました。5つの事例をどのようにご覧になりましたか。

中森 5つの事例にはいずれも、全国の学校が今後の自校のあり方を考える上での様々なヒントがあったと思います。まず注目したのは、多様な学びの提供です。宮城県・仙台市立仙台大志高校（P.13～15）や岡山県・私立岡山理科大学附属高校通信制課程（P.16

～18）が導入している単位制は、学年の区分がなく、生徒が自分で履修科目を選ぶため、自分のペースで学ぶことができます。必修科目以外の科目を生徒が自分の興味・関心を基に選べるようにすることは、今後の教育課程のあり方の1つとして、もっと多くの学校で検討されてもよいことだと思います。

柏木 仙台大志高校の生徒は、「勉強は嫌いだけれど、自分で選んだ授業だから頑張れる」と話していました。

中森 学びが自己選択・自己決定できる機会を広げることが、生徒の学習意欲を高めます。

柏木 本誌10月号の特集で取り上げた

「自己調整学習」も、まさに生徒が自己選択・自己決定して進める学びでしたが、それに取り組んだ生徒は、主体性や学習意欲を高めていました。

中森 ただ、自校内で多様な科目を設定することが難しい学校があるのも実情です。そこで、他校や大学等の授業の履修を卒業単位に認定したり、他校と遠隔授業を行ったりするといったことが考えられます。少子化が進む中、北海道高等学校遠隔授業配信センター（P.10～12）のように、教育委員会が遠隔授業を行うケースは今後増えていくことでしょう。

柏木 すべての科目を自校内で設定しよつとするのではなく、外部と協働す

VIEWnext 編集部
統括責任者
柏木 崇

ることが重要ということですね。

中森 一方で、自校の生徒に合う教育活動は積極的に行うべきで、その1つが、各校の判断で実施が可能な「学校設定科目」の設定です。私は定時制課程の教頭の時に、生徒の社会性を高めようと、対人関係能力などのソーシャルスキルについて学ぶ「トータルライフ」を学校設定科目として設定しました。

柏木 岡山理科大学附属高校通信制課程は、単位認定に必須のスクーリングなどとは別に、多様な活動を用意した「@schooler型」を設け、生徒が生活習慣を身につけられたり、社会との接点を持てるようにしたりすることで、生徒の自立を支援していました。

中森 それはまさに学校らしい、教育的で、素晴らしい取り組みだと思います。

柏木 ただ、活動は任意参加のため、生徒が登校してこない時の理由が、体調不良なのか、怠慢なのか分かりにくく、生徒にどう声をかければよいのか悩んだと、同校の先生は言われていました。

中森 活動への参加を生徒の主体性に委ねている点は、教育的配慮として重要です。学校が大事にしている指標、例えば、スクール・ポリシーを行動規範として生徒と共有し、それを声かけの基準とすることが考えられます。

生徒主体の授業改善に必要な視点とは？

柏木 多様化する生徒への対応においては、仙台大志高校が取り組む、ユニバーサルデザイン（以下、UD）の視点での授業設計の重要性を感じました。同校はそのノウハウを資料の形でまとめ、異動してきた教師でも自校の生徒に合った授業をスムーズに行えるようにしていました。

中森 どのような生徒も安心して学びに集中できる授業設計は、すべての学校が配慮したい点の1つです。本学でも、UDの視点での授業設計が推奨されています。ただ、特定の生徒への配慮といった視点だけでなく、学校全体に広がりにくい場合もあるかもしれません。授業改善の一環だと、自校の教師に捉えてもらうようにするとよいでしょう。

柏木 生徒目線での授業改善について、ほかに留意すべき点がありますか。

中森 生徒に授業アンケートを行う学校は多いと思いますが、生徒に直接、授業のよい点や改善してほしい点を聞くことが大切です。生徒が主語の学校づくりをするのであれば、授業改善や学校行事の運営などに生徒が参画できるようにすべきではないでしょうか。

また、小・中学校では今、自己調整

学習など、児童・生徒が主体的に学びに取り組む授業づくりが盛んに進められています。数年後には、授業で主体的に学んできた生徒が高校に入学してきます。高校の先生方には小・中学校の授業を見学し、学びの変化を体感した上で、これからの授業について考えを巡らせてほしいと思います。

市町村との連携が高校の活性化の鍵

柏木 地域連携によって生徒の学びの機会が広がっている事例を紹介しましたが、宮崎県立高千穂高校（P. 22）は、前校長が自ら町役場に地域連携を提案し、実現させていました。

中森 多くの市町村は地域の存続が重要な課題で、生徒が地域で活動し、地域を盛り上げてくれることは大歓迎です。生徒が活躍する姿を地域住民に見てもらえば、学校のPRにもなります。校長の裁量で進められる市町村との連携は、高校の活性化につながります。

高校との連携に価値を見いだしている企業も多いと思います。例えば、若手社員が生徒の探究学習の支援を通じて新たな気づきを得たり、生徒に自社を認知してもらうことが将来の人材確保につながったりします。高校が企業に

協力をお願いするという考え方ではなく、高校と企業が価値の交換をするわけです。地域の経済同友会や商工会議所などを窓口にするとういでしょう。

柏木 HAMA DA教育魅力化コンソーシアム（P. 19）では、市内の高校間の横の連携と、市立小・中学校との縦の連携を活用して、生徒は地域で学びを深めていました。

中森 校種間連携はもっと広まるとよいですね。高校生が小・中学生の教科学習や探究学習を支援することは一案です。高校生は小・中学生に教えることで自分の学びが深まりますし、小・中学生にとっては高校生がロールモデルになります。児童・生徒の交流を介して、教師も学校間・校種間で交流し、先ほど重要だとお話した小・中学校の授

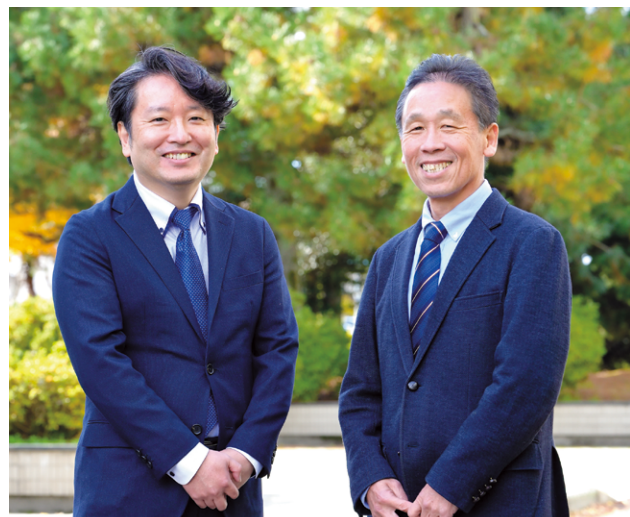


図 すべての生徒の学びの機会を保障するために必要なアクションと管理職の役割

学びを自己選択・決定できる仕組みの構築

教育課程の弾力的な編成、多様な選択科目の設置、学校設定科目の活用、自己調整学習の導入等により、生徒が自分の興味・関心や希望進路、自分に合う学習ペースに基づいて、必要な学びを自分で選べるようにする。

参考実践 ▶ 事例2 (P.13-15)、事例3 (P.16-18)

安心・安全な学びの場づくり

中学校や保護者からの生徒情報の収集及び校内での情報共有を徹底し、その情報も踏まえながら、ユニバーサルデザインの視点等も含めた授業設計、生徒の心情に配慮した声かけ等が行われる授業実践により、どのような生徒も安心して学べるようにする。

参考実践 ▶ 事例2 (P.13-15)、事例3 (P.16-18)

ICTを活用した遠隔授業の導入・実践

小規模校に通う生徒が、教師不足のために自校の教師による授業を受けられない科目等を自校にしながら、また、不登校の生徒や病室等において病気療養中の生徒などが学校以外の場所で授業を受けられるよう、ICTを活用した遠隔授業を導入・実践することで、すべての生徒の学びの機会を保障する。

参考実践 ▶ 事例1 (P.10-12)、事例3 (P.16-18)

多様な考え・価値観に出合わせる外部連携

探究学習等に取り組む上で必要な教育資源が少ない地域の高校などに通う生徒でも、高校間・校種間・地域等の外部と連携し、コーディネーターの仲介や、ICTを活用した遠隔教育・授業等も駆使しながら、多様な人と出会い、多様な考え・価値観に出合えるようにすることで、生徒の学びを広げ、深める機会を保障する。

参考実践 ▶ 事例4 (P.19-21)、事例5 (P.22-24)

管理職の柔軟なカリキュラム・マネジメント、リーダーシップ、ファシリテーションの下、
上記のようなアクションを取り入れ、実行する

※各事例と本記事を基に編集部で作成。

校長の裁量を最大限生かして、
学びの機会を保障する

柏木 学校ができることは様々あると言えそうですが、管理職の先生方にはどのような役割を果たすことが求められるでしょうか。

中森 教育委員会にいた経験から言うと、行政は基本的に前例がないことは是非を判断することが難しい立場にあります。校長の裁量で様々な挑戦をしてもいい、効果があれば全県に広めたいという思いがあります。校長の裁量は大きく、大概のことはできます。校長が先頭に立って積極的に挑戦すること

業見学などが行われれば、より多様な視点での授業改善が期待できます。
柏木 生徒が校外で活動することを心配する教師の声もあります。
中森 危機管理は重要ですが、生徒を学校の管理下に置くという考え方はなく、生徒が自分で危機管理できるように、校外活動時のルールを生徒と共有することが大切です。保護者の同意を得る、公共交通機関を利用するといったルールを決めた上で、生徒に活動の自由を保障するのがいい。地域で活動するためには、日頃から地域と信頼関係を築いておくことも必要でしょう。

と、挑戦する学校づくりに向けて、互いに学び合う教師集団を築くことが、管理職の役割として重要だと考えます。
柏木 働き方改革が進む中、研修の時間を確保するのも難しいようですね。
中森 新たに研修を行うというよりも、教師が互いに日々の実践について語り合いながら、価値づけをしていくことが大切です。例えば、教師一人ひとりが自分が取り組んだ授業改善についてA4判1枚にまとめ、それらを学校全体で学期末などに共有して学び合う学校もあります。教師が互いに認め合い、次の挑戦を応援する、そんな学校づくりがますます求められているのではないのでしょうか。

柏木 学校の変革の実現には現在の活動を生かすという視点が重要ですね。最後に、今後の学校のあり方について、中森先生の考えをお聞かせください。
中森 これまでの日本の学校は、自校内ですべての教育活動を完結させることが基本でした。しかし、学校は社会のシステムの一環にあります。全国の各校には、地域の他校や小・中学校、自治体、企業などと協働し、あるいは地域を超えて日本各地や海外ともつながりながら、柔軟なカリキュラム・マネジメントの下、生徒の多様な学びを支えていってほしいと思っています。